



森林総合研究所 多摩森林科学園 旧庁舎にて

Photo by Keiko Godo

巻頭●対談

木の上へのぼると、みえてくる世界

作家 三浦 しをん × 宇都木 玄 森林総合研究所 林業生産技術研究担当・研究ディレクター

林業の世界に放りこまれた都会っ子の青春を描いた小説『神去なあなあ日常』の作家で林家を祖父にもつ三浦しをんさんと、林業が抱える課題と展望を探る研究者の宇都木玄氏に、森と林業をめぐるお話をして頂きました。

宇都木 ● 家族が三浦さんの大ファンなもので、まずサインして頂いてもいいですか？

三浦 ● (笑) もちろんです！ (本にサイン)

宇都木 ● 家族のことを考えると、『風が強く吹いている』や最新作の『愛なき世界』のお話をうかがいたいところなのですが、編集部から林業の話をせよと強いお達しが(笑)。なので『神去なあなあ日常』を中心に聞きしたいと思います。

この作品でなによりもすごいと思ったのは、主人公の兄貴分にあたる飯田与喜が、斧で木を伐り倒している場面です。チェーンソーではなくて、斧で木を伐るという発想に度肝をぬかれました。

三浦 ● 少し前の時代の林業を描きたいなと思ったんです。話自体は現代なんですけど、なぜかこの村は昔風に林業をやっているという設定にしたくて……。それと、ヨキという名前の登場人物をだしたかったです。

宇都木 ● あ！ ヨキが先にあったんだ。ヨキというのは、斧の昔の呼び名ですね。

三浦 ● そうです。それで、与喜に斧を持たせるか、みたいな(笑)。

宇都木 ● そういえば与喜が飼っている犬の名前はノコでしたね。それにしても、チェーンソーではなくて斧を持ち歩いていて、木を伐り倒す名人という設定がすごい！

三浦 ● なんかそのほうがワイルドっぽいじゃないですか？ いさぎよく斧一本(笑)。

宇都木 ● 映画の『WOOD JOB!』*の伊藤英明さん。体格もよくてベストキヤストですよ。三浦 ● いやあ、もう素晴らしいです！ この

***Key Words** 映画「WOOD JOB! ～神去なあなあ日常～」

三浦しをんさんの『神去なあなあ日常』を原作として、2014年に製作された映画。矢口史靖監督・脚本。主人公の平野勇気役を染谷将太、兄貴分の飯田与喜役を伊藤英明が好演した。

© 2014 「WOOD JOB! ～神去なあなあ日常～」
製作委員会



ヨキはね、まさにイメージぴったりです。

宇都木 ●伊藤英明さんもきつと斧を持って出演してるんだろなあとと思って映画をみたら、ちゃんとチェーンソーでした(笑)。

三浦 ●監督の矢口史靖さんが脚本も書いているのですが、事前に念入りに取材に行かれているので、さすがに「斧はやめとくか」ってなったんじゃないでしょうか。

宇都木 ●斧で太い木を伐り倒すには、相当な体力を消耗するし、時間もかかりますね。

三浦 ●昔は斧で伐ってたんですよね？

宇都木 ●近代以前は、やはり木を伐る道具の主役は斧だったと思います。

三浦 ●人間は古代から木を伐ってきてるわけですからね。たとえば足柄山の金太郎！

宇都木 ●金太郎が持っているのは大型の斧のマサカリですね。ヨキはどちらかというとマサカリより小型の斧の名称です。

ところで主人公の平野勇気くん。都会っ子で、最初は虫もだめ、ヒルに吸いつかれたりとか、よく耐えましたよね。林業の現場では、忍耐できる子どもたちが求められていると思うし、育てていくのはとても大事です。

三浦 ●勇気くんは：おおらかです(笑)。

宇都木 ●勇気くんが頑張ることができたのは、やはり憧れの直紀さんがいたから？

三浦 ●もちろんそれは大きいと思うんですが、山仕事をする生活が苦にならない人もいると思うんですね。

生き物相手の仕事って絶対面白いし、自分の工夫を活かして、生命力を感じられる仕事に喜びや楽しみを見出す人は必ずいると思います。

ます。じつは山仕事に向いてるのにべつの仕事をする人って結構いると思うんです。

宇都木 ●たしかに自分から志望して林業に飛びこんだ子たちは上手くやっていることが多いですね。朝起きて電車に乗らなくてもいいし、会社勤めとはちがう縛られない生き方には魅力があるのだと思います。三浦さんのご実家は林業を営んでおられたとか？

三浦 ●私の祖父が三重県的美杉村で林業をしていました。山奥の村ですが、林業の現場は集落の近くにはないので、子どものころに祖父が仕事をしている姿を見たことがなくて、それで林業ってどんな仕事なのかとずっと興味があつたんです。

村に、山仕事の古い道具が展示してある建物があつて、そこに昔の林業の写真も飾ってあつたんです。丸太を担いでいるおじいさんとか、伐った木を運びだす「木馬道^{きんまみち}」や、山と山のあいだの木橋だったり、丸太をガンガン斜面に転がして落としていたり、川に浮かべて流してたり、ヨキや大鋸^{おが}とかの実物もあつて、面白いなあと思ってたんです。それで、その時代の林業を現代に描写したいと思ったんですね。

宇都木 ●『神去なあなあ日常』に描かれた林業への想いは、その原体験にあつたんですね。

三浦 ●「人力でこんなこととしてすごいなあ」という世界を描きたかつたんです。もちろんいまは機械化されている部分も多いのでしょうけれど、いまでも急斜面に苗木を植えたり、チェーンソーで伐採はしますよね。

宇都木 ●伐採作業に関しては、若い人たちに



映画「WOOD JOB! ～神去なあなあ日常～」

DVD & Blu-ray

伊藤英明さんの伐倒がかっこいいと、三浦さんも絶賛！

© 2014 「WOOD JOB! ～神去なあなあ日常～」
製作委員会

***Key Words** 木馬道(きんまみち)

伐採した木材を集積場まで運ぶための道。かつては木材を牛馬に引かせたり、馬そりに載せて運んだので、このように呼ばれた。丸太をコロのように敷き詰めた道に木材を直接すべらせて搬出することもあった。やがて森林鉄道となり、林道の整備によって姿を消した。



三浦 しをん (みうら しをん)

作家。1976年東京生まれ。2000年、小説『格闘する者に〇』でデビュー。2006年、『まほろ駅前多田便利軒』（文藝春秋）で直木賞受賞。2012年、『舟を編む』（光文社）で本屋大賞受賞。近著に『のはな通信』（KADOKAWA）、『あの家に暮らす四人の女』『愛なき世界』（中央公論新社）など。エッセイの名手としても知られる。

「気分転換は『漫画を読むこと』というインドア派なので、林業の取材時も山を登るのに難儀しました。いずれ斜面にエスカレーターを（それは無理か）。機械化万歳！」

巻頭●対談

じつは山仕事に向いてるのに べつの仕事をしてる人って結構いると思うんです。

人気がありますね。

三浦 ●なんで伐採なんだろう？ やっぱり気持ちいいんですね。倒れたぞー、ドーンみたいなところが。

宇都木 ●なぜかというところ、それは機械化されてきたからです。高性能林業機械の車両に乗って、らくに伐採できる。

三浦 ●あ、そこが楽しいんだ。

宇都木 ●いま的林業機械はエアコンも効いてるし、斜めになっても椅子はまっすぐなので、いたって快適です。しかも若い女性が機械をあつかうのが上手で。これから林業の現場は女性が活躍する場になると思います。

三浦 ●林業女子とか、増えてるそうですね。

宇都木 ●木を伐ったあとは、苗を植える場所をきれいにする「地拵え」をします。そのあと苗を植えて、邪魔なツルを切ったり、生えてきた広葉樹や雑草を伐る「下刈り・除伐」をします。それから大きく育ったスギやヒノキなどを間引く「間伐」をする*。「地拵え」から「除伐」までは人力作業がほとんどなので、若い人たちはそこできじけることが多いようです。とくに下刈り作業で挫折する。

三浦 ●下刈りがいちばん大変つていいですね。

宇都木 ●そうした大変な作業を機械化する研究もしています。機械の入れる斜面は30度くらいまでです。スキー場の急斜面ぐらい。そこに対応する機械を開発しているのですが、下刈りでは、苗を植えたその周りを刈らなくてはいけない。機械でそうした繊細な作業をするには、慣れた人なら苗が等間隔で植わっているのをからだで覚えていいるから、苗を伐つ

てしまうようなことはないんですが、若い人は感覚がわからないから、まちがって苗を伐ってしまう。小説の中の勇氣くんみたいに。斜面や繊細な作業に対応するために機械を小型化しようとする、こんどは木を伐ったあとの根つこが残っていると小さい機械では走れない。じゃあ、どうするかというと、それなら根を砕きましようとなる。

三浦 ●ええええええ！（笑）

宇都木 ●下刈りをするマシンをかつ根株碎きマシンにしてみよう。

三浦 ●「抜根くん」て名前にするのいいと思います（笑）。

宇都木 ●その「抜根くん」（笑、車幅が1メートルだから、下刈りをするときに1.6メートルのところに苗があると踏んづけちゃう）。

三浦 ●アハハ、融通が効かないんですね（笑）。どうしたらいいんですか？

宇都木 ●苗を植える前にまず「抜根くん」を走らせる。で、「抜根くん」の横にウイングをつけて、そこからスプレー缶で植える場所にシュツ、シュツ、シュツって印をつけながら、「抜根くん」が通れる幅で苗を植えればいいんじゃないかなど。

三浦 ●「抜根くん」が印をつけたスプレーのところに苗木を植えていけば、下刈りのときはそのあいだを走れますね。

宇都木 ●そうすれば、おなじ「抜根くん」を3年後に走らせても絶対に踏んづけないからね。で、いま「みちびき」っていう新しい衛星が飛んだでしょ？ 日本の上をいつも飛んでる高精度のGPS衛星。



三浦しをんの本

『神去なあなあ日常』
『神去なあなあ夜話』
徳間文庫

*Key Words 地拵え、下刈り、除伐・間伐

林業の作業を大きく分けると、つぎのような流れになる。▶ P.11 参照

- ① 森をつくる「造林」（地拵え・植栽）
- ② 森を育てる「育林」（下刈り・除伐・間伐）
- ③ 木材を供給する「間伐」「主伐」（伐採・造林・集材・製材）

宇都木 玄 (うつぎ はじめ)

1966年神奈川県生まれ。1989年信州大学理学部生物学科卒業。
1992年同大学院卒業。同年森林総合研究所入所。北海道支所
チーム長、植物生態研究領域チーム長を経て、現在、研究ディ
レクター（林業生産技術研究担当）。農学博士（東京大学）



「学生時代は北アルプスでスキー三昧。冬の夜長はJAZZ
オーディオマニア。いま、タイでマングローブ保全、オー
ストラリアで乾燥地緑化に取り組んでいます。森林万歳！」



巻頭●対談

多様な林業の在り方に目配りできるような 総合的なシステムモデルが求められているんです。

三浦 ● あくニュースでやってましたね。

宇都木 ● その「みちびき」を利用したGPS
システムに導いてもらえば、近い将来苗木を
踏みつけずに走れるようになると思うんです。
農業では、すでに田植え機などが自動運転を
行うデモンストレーションをしていますね。
「抜根くん」にも自分の軌道を覚えさせてお
いて、あとは「抜根くん」行けという、無
人で作業するという。いまのところ、これ
が使えるのが北海道や東北に多い緩斜面だけ
なけれど、10年後には「抜根くんスペシャル」
が林業を支えているというのが夢なんだよね。
三浦 ● 『神去なあなあ』の舞台でもある三重
県の尾鷲の山とかは無理ですよ。傾斜がす
ごく厳しいから。

宇都木 ● ですね。急斜面は、やはり人力で植
えて、下刈りをして、チェーンソーで伐って、
ワイヤーで吊って下ろす。これからの技術開
発にもよりますが、苗木の活着率という点か
らいうと、やはり一生懸命人間が掘って、て
いねいに裸苗を植えるのがいちばんです。
三浦 ● あくやったことあります！ あれは
めっちゃ難しい。こう根を広げてあげて、ク
ワで穴を開けて、植えつけて。

宇都木 ● 根を広げるのが重要なんです。機
械では対応できないから、いまはコンテナ苗
という筒の中に土を詰めてそこにタネをま
いて育てた苗を使います。根鉢が崩れないから
将来的に機械で植えつけも考えられますね。

三浦 ● そういえば、映画でスギのタネを採る
シーンがありますよね？ あれって、いまも
おなじようにタネ採りをしているんですか？

宇都木 ● いま日本で植えられている苗木は、
たいいてい森林総研の林木育種センター*でつ
くった優良品種のタネを各都道府県で育てた
り、挿し木でふやして配るなどしていますね。
三浦 ● あんな風にタネを採って育てていたん
だなんて、映画ではじめて知りました。それ
にしても圧巻のシーンでしたね。あんな高い
木の上から山を見渡したら、世界観が変わ
るでしょうね。木の上へのぼることで、みて
くる世界があるだろうと思うんです。人間の
営みにしても、山の姿にしてもべつの視角で
みえるわけだから……。

宇都木 ● そうなんです。これからの林業技術
は広く日本全体をみながら、地域ごとのカス
タマイズが必要になります。

たとえば、いい親木をもっている林家ならば、
タネを自分の山で採っている事もあります。
おなじスギでも、それぞれの地域に根ざした
木からタネを採ったほうがいい木に育つし、
その方が経費も安くなりますから。

三浦 ● やっぱ、地元の木のほうが気候に
あっているのですね。

宇都木 ● どの林業でも「地植え」「植林」
「下刈り」という一連の作業はおなじですが、
それぞれの地域によってお金がかかる場所は
ちがうんです。たとえば、草がいっぱい生え
る地域は、草刈りを中心と考えなきゃいけな
い。平坦地で伐採によって枝葉がたくさん林
地に残る場所ならば、地植えの効率化を考え
なくてはならない。一年中植栽を求められる
場所では、乾燥に強い苗をどうするかを考
えなくてはならない。それぞれの地域の事情

*Key Words 林木育種センター

地球温暖化防止、林業の成長産業化、花粉発
生源対策等を推進するために、遺伝的に優れ
た特性を持つ品種を開発し、新品種を原種を
生産して、各都道府県等に配布している。



◎既刊特集を
参考に

季刊 森林総研 No.29 (2015.5.29)

特集：今後の再造林の推進に向けた
低コスト化研究



★ Key Words 多摩森林科学園 森の科学館

今回の対談場所となった多摩森林科学園は、敷地内に樹木園・試験林と全国から遺伝資源を蒐集したサクラ保存林を擁し、生物・生態系を中心とした研究を行っている。附属する樹木園と森の科学館での展示が一般公開されている。写真は、園内に出没するほ乳類の展示をみる三浦しをんさん。
<https://www.ffpri.affrc.go.jp/tmk/visit/index.html>

によって変わってくるわけです。

三浦 地域のも多様性にどう応えるかですね。

宇都木 研究する時に、すべてを総合してコストを計算できるシステムをまずつくり、それぞれの地域では、そのシステムのどこを中心にしたら安くなるか、というバリエーションを選ぶことができるような林業の在り方を模索していくのではないのでしょうか、これまでの研究は個別研究が多かったんです。

それをいま変えなくてはいけない時代が来ている。下刈り機械とか、育苗の経費を安くする方法は個別要素技術です。それらを組み合わせ、全体として最大に効力を発揮するようなシステム開発がいま林業界にはいちばん求められていると思う。

三浦 それって、かなりの難問じゃないですか？ だって、たとえば同じ地域でも、山のこつちの斜面と、あつちの斜面では微妙に土壌や日あたりがちがうから、どこにコストがかかるかも全然ちがうわけですよ。そして、山を持つてゐる人たち一人ひとりに斜面ごとに提案をしなくてはいけないわけで、この斜面にはこれがよろしかろう、こつちはこれがよろしかろうって。それって無茶苦茶大変ですよ。ここを特化して削減すれば、全体では黒字になるといった計算もしなくてはいけないし。そんなことできるんでしょうか？

宇都木 それをちょうど三日前に……。

三浦 なんと！ (笑) もう手を打っておられたか (笑)。

宇都木 いま流行りのドローンにカメラを搭載して、地形の情報を読みとるんです。

三浦 えええ……！

宇都木 それを1メートルレベルの地形図に落とし込んで、どこにどんな木や草が生えていて、どんな斜面かという情報を分析して、それならこの樹種を植えよう、こういうサイズの木を植えよう、下刈りはこうしよう、と細かく決めていくプロジェクト……。

三浦 でも尾鷲の山とかは、どうなるのかなつて思いますね。斜面がきつところは。

宇都木 そうですね。じつは暖かい地域では100年待てば育つところを寒い地域では200年待たないといけない。だけど緩斜面は寒い地方に多い。その部分をいまお話しした技術でクリアする。北欧の林業がそれで、森林の生産力は低けれども、機械で徹底的に効率化することでカバーしています。

オーストリア南部は、尾鷲のように急斜面も多いですが、時間をかけて木を太らすことで生産性を高めている。もちろん土地条件の悪い地域もあるので、そうした地域にはきちつと目配りして補助金を的確に入れていく。そう考えると、尾鷲は木の成長がいいですね。生産性の高い林業ができる地域だと思います。

三浦 そうなんですよね。いい山でした。

宇都木 それぞれに生き様があるんです。地域の多様な林業の在り方に目配りできるような総合的なシステムモデルというのが、求められているんですよ。

三浦 うーん、そっか、林業の未来は暗いという話ばかり聞きますが、なにか、より活性化していく道がみえてくる感じですね。

宇都木 はい、そこに光はあると思います。

三浦しをんさんの本



『ぐるぐる♡博物館』
 実業之日本社